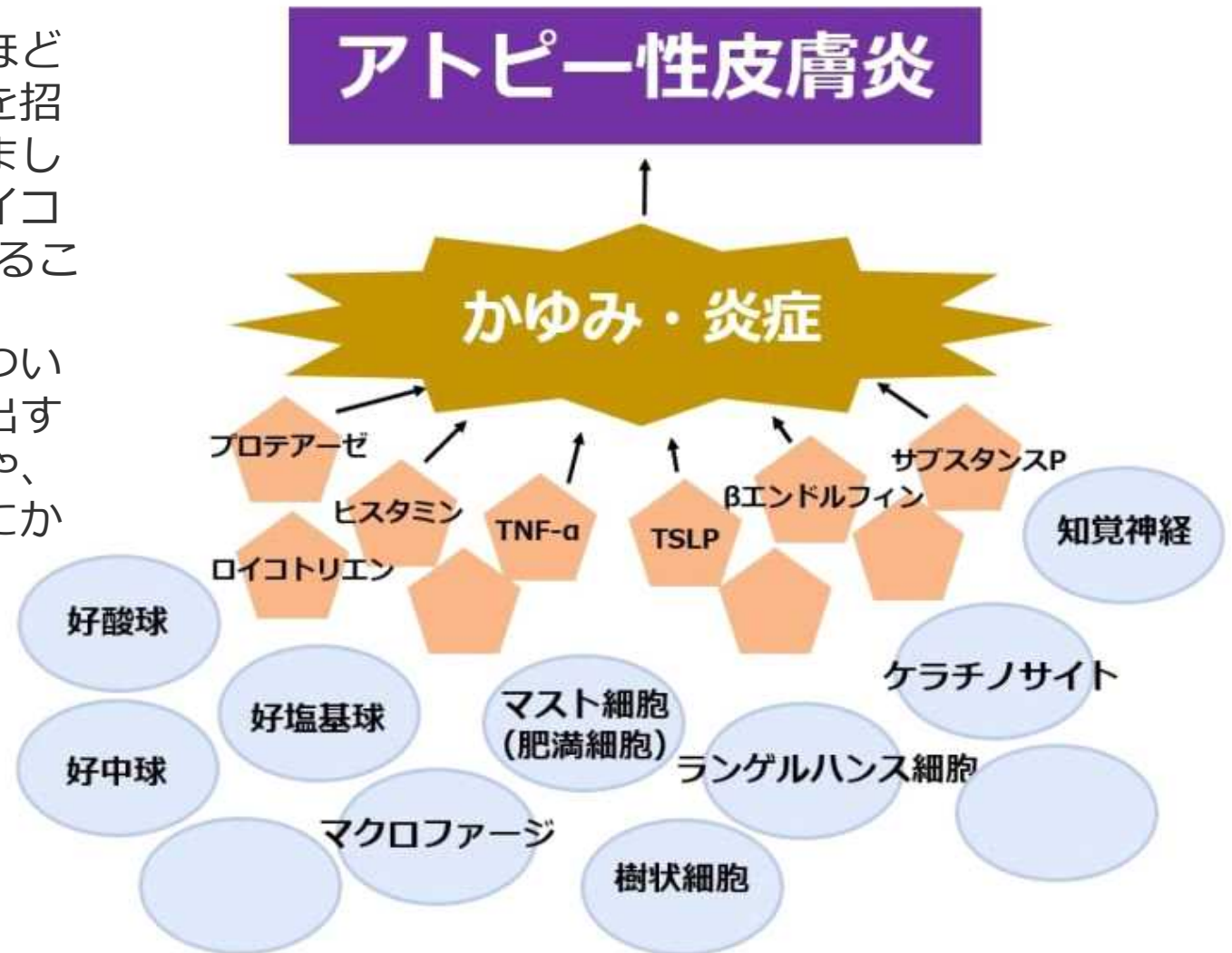


アトピー性皮膚炎のメカニズム

患部で働く様々な炎症物質

アトピー性皮膚炎に関する研究はこの20年ほどで飛躍的に進みました。以前は、かゆみや炎症を招く分子といえば「ヒスタミン」と考えられていましたが、現在はヒスタミン以外にもTNF- α や、ロイコトリエン、TSLPなど、多くの分子が作用していることが判明しています。

また、それらの分子を生み出す細胞の活動についても研究がすすめられ、大量のヒスタミンを放出するマスト細胞（肥満細胞）以外にも、好塩基球や、表皮のケラチノサイトなど、様々な細胞が炎症にかかわっていることが分かってきました。

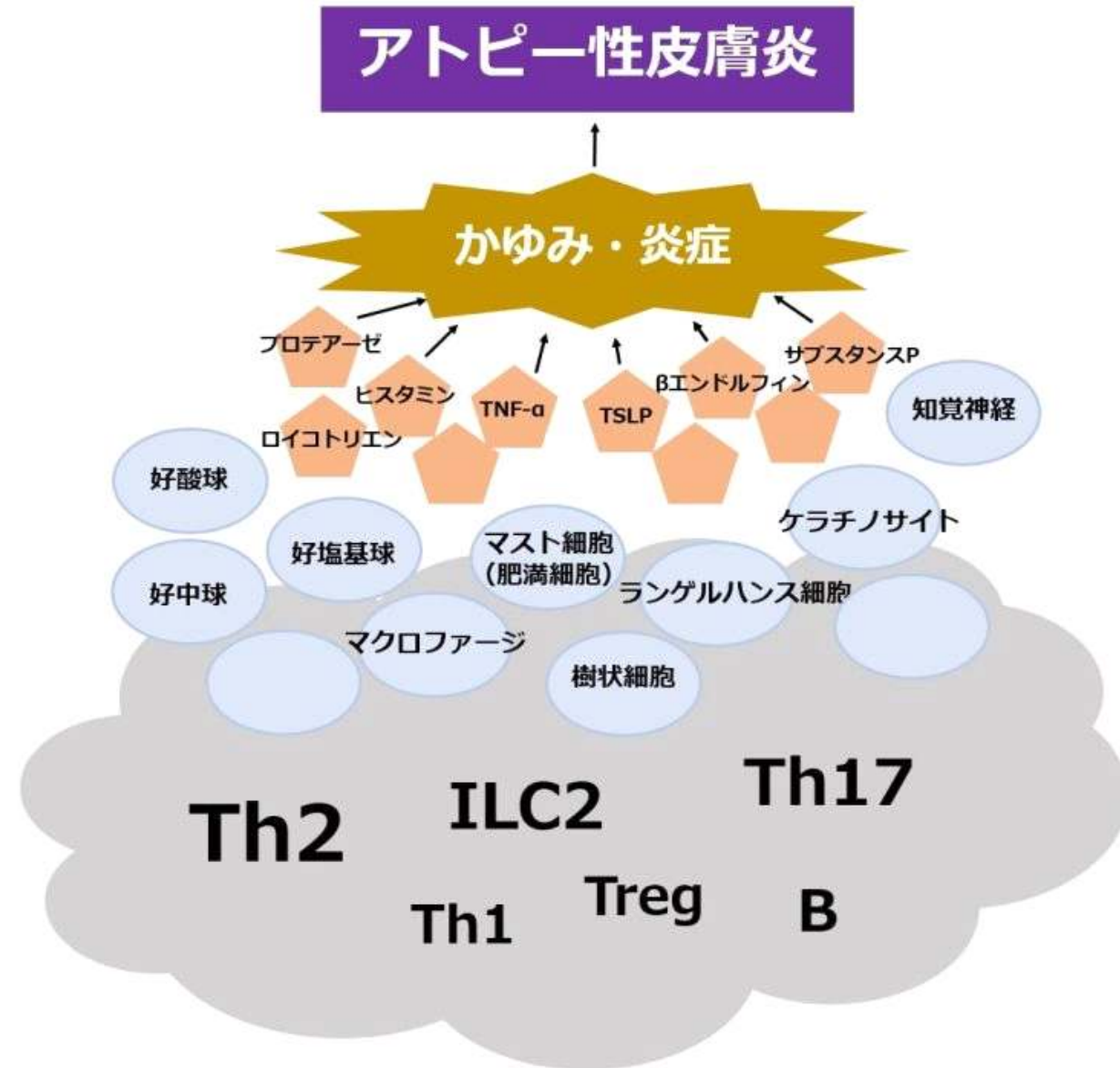


アトピー性皮膚炎は皮膚だけでおきているのではない

様々な炎症物質や産生細胞が働いていることがわかった一方で、アトピー性皮膚炎のメカニズムにはもうひとつの謎があります。それは、これらの炎症物質や産生細胞はなぜとめどなく働き供給され続けるのか、ということです。

通常、生体の炎症反応は段階を経て、次第に治まっていきます。ある程度経過した炎症箇所には抗炎症物質が供給され、やがては癒えていくのです。

しかし、アトピー性皮膚炎では炎症がいつまでもくすぶり続け、時には過剰に悪化してしまいます。この点についても多くの研究がなされ、腸内環境や神経、ホルモン分泌器官のコンディション、免疫バランスなどが関わっていることがわかってきました。アトピー性皮膚炎とは皮膚だけでおきているのではないのです。



根本原因は「細胞」の働き方にある

では、腸内環境や神経、ホルモン分泌器官のコンディション、免疫バランスなどが関わっている、とはどういうことでしょうか。これについてもう少し具体的に表現すると、これらの組織の細胞たちの働きが、結果として皮膚炎につながるような働きになってしまっている、と言い換えられます。

細胞の働きというのは、必ずしも一つの方法で働くのではなく、様々な条件が与えられると、それに応じて変化します。たとえば、酸素が足りなかったり、栄養が足りなければ、足りない場合のモードに切り替わって、その時用の働きをします。また、細胞は核内にもっている遺伝情報に従って仕事をしますから、遺伝情報の文字が間違っていたりすると、本来の働き方とは違った働き方をする場合があります。

アトピー性皮膚炎の人の体内では、細胞たちの働きが、何かの原因で炎症を導きやすい状態になっていて、それが皮膚炎となって表れているのです。

アトピー性皮膚炎のメカニズム解明は続く

アトピー性皮膚炎のメカニズムに関する研究は現在も多く行われており、今後も新たな発見が続くと思われます。また人間の免疫のしくみには、まだまだ解明されていない部分が多く残されていて、新しい発見があればこれまでの教科書が一気に書きかわる可能性もあります。そうなれば、免疫と深く関わるアトピー性皮膚炎の理解についても大きな変更が行われるかもしれません。アトピー性皮膚炎の全容解明にはまだまだ時間がかかることが予想されます。

とはいえ、これまでに明らかにされたメカニズムから新薬の開発や予防法が模索されています。また、炎症を起こしやすい体質を導く遺伝的条件についても研究され、これまでにアトピー性皮膚炎に繋がりやすい遺伝子変異が数十種見出されています。こうした研究により、的確な治療法や薬の選択、原因物質の除去が可能になっていくことでしょう。